「聖なる生活」（ローマ六・一五～二三）

1　洗礼

今日の聖書は、ローマ書六章の後半です。先週は、六章の前半、一四節までを、取り上げました。

そこで改めて学んだのは、〈洗礼〉の持つ意味でした。洗礼というのはキリスト者として生きる始まりです。キリスト者として生きるということは、もう少し言えばキリストと共に生きる始まりのことです。キリストと共に生きるというのは私どもの「内に宿っている」「キリストの霊」（八章を見よ）と共に、またそれに生かされて、生きるということです。

洗礼によってキリストと一つにされることを、先週の聖書箇所はいろいろに表現していました。思い起こせば、例えば「キリスト・イエスに結ばれるために洗礼を受けた」という言葉（三、一一節）がありました。更に、キリストの死と復活に「あずかる」（三～四節）とか、「キリストと一体になってその死の姿にあやかる・・・その復活の姿にもあやかる」（五節）、もっと簡単な言い方で「キリストと共に」（八節）死に、かつ生きる、というような言葉もありました。

こうして洗礼と共に私どもには決定的なことがすでに起こったのです。この恵みをどんなときも忘れてはなりません。その上で先週私があえて強調したのは、洗礼は始まりであってゴールではないということでした。ゴールは天国です。神の国です。永遠の命です。

こうした〈生涯求道者〉としての歩みがキリスト者としての歩みです。この歩みの始まりとしての洗礼の背後には一人ひとりの決断があります。志があります。信仰の告白への熱い決心があります。そこに真剣な個人がいます。それを私どもの教会は大切にしています。しかし同時に、洗礼において私どもが思い起こし、注意を向けなければならないのは、そのような一人の人間の決意だけではありません。そこには神の決意、神の恵み、神の選びがあるのです。「あなたがたがわたしを選んだのではない。わたしがあなたがたを選んだ」（ヨハネ一五・一六）。神は、私どもを見込んで、お選びになった。神の期待が洗礼には込められています。それに応えて生きるところにキリスト者の生活はあるのです。

さて洗礼に関して、先週申し上げたことに一つだけ付け加えた上で今日の箇所に入りたいと思います。

一つだけというのは洗礼というのは教会の任意の行事ではないということです。してもいい、しなくてもいいというのではないのです。ご承知のように、プロテスタント教会は洗礼式と聖餐式、この二つを、聖礼典〔聖なる儀式〕として重んじてきました。それはこの二つともキリストご自身のご命令に基づくからです。洗礼についてマタイによる福音書によって紹介すると、こうです。

わたしは天と地の一切の権能を授かっている。すべての民をわたしの弟子にしなさい。彼らに父と子と聖霊の名によって洗礼を授け、あなたがたに命じておいた

ことをすべて守るように教えなさい。わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいる（マタイ二八・一八～一九）。

弟子たちに与えられた、これは、地上におけるイエス・キリストの、最後の言葉です。以来、教会は、カトリック、プロテスタントを問わず、このキリストのご命令に従ってきたのです。

ところで洗礼を行うのは、それぞれの地域の教会（ローカル・チャーチ）、〈各個教会〉と呼ばれる個々の教会です。個々の教会だけです。教区も教団も、説教や聖餐式は行っても、洗礼はいたしません。そのことの意味は重い。洗礼は個々の教会でしかなされない。ここに私どもに許された光栄な務め、使命があります。このことをこれからも大切に考えていただきたいと願っています。

2　神に対して生きる

さて今日は第六章の後半です。当然のことながら、前半で語ったことを受けて、パウロは書いています。

六章の前半、一四節まででパウロが語ったことは、先ほど少し振り返ってみたように、洗礼についてでした。洗礼とともに、私ども「古い自分」に訣別し「新しい命に生きる」ことになるということでした。

これを受けてパウロは、六章後半で、この〈新しい命を生きる〉ことについて更に語り始めます。

そのような展開は、じつは、六章前半ですでに（先週は触れることができなかったのですが）暗示されていました。次のような言葉が、今日の箇所の少し前に、記されていました。

あなたがたの五体を不義のための道具として罪に任せてはなりません。かえって、自分自身を死者の中から生き返った者として神に献げ、また、五体を義のための道具として神に献げなさい（一三節）。

ここに「五体」という言葉で出てきます。体、その肢体という意味ですが、新約でもここにしか出てきません。パウロにとって、信仰によって生きるということは、ただたんに〈心〉のこと、内面的なことだけではないのです。〈体〉に関わること、外面的なこと、社会的なことでもあるのです。

私どもは、その心と体において、汚れと不義に関わってはならない。むしろ自らを義のための道具として献げよと言われています。それが新しい命を生きること、神に対して生きることです。

同じことを、今日の箇所で、パウロは、「奴隷」という言葉を使って説明しています。私どもはかつて「罪の奴隷」であったが、今や、「義の奴隷」、「神の奴隷」（二二節）となって神に仕える者となっているのだと。

知らないのですか。あなたがたは、誰かに奴隷として従えば、その従っている人

の奴隷となる。つまり、あなたがたは罪に仕える奴隷となって死に至るか、神に従順に仕える奴隷となって義に至るか、どちらかなのです。しかし神に感謝します。あなたがたは、かつては、罪の奴隷でしたが、今は伝えられた教えの規範を受け入れ、それに心から従うようになり、罪から解放され、義に仕えるようになりました（一五～一八節）。

パウロは、ここにあるように、私どもが洗礼とともに〈新しい命に生きる〉ようにされたことを、何か、自分が変わることとして、しかも自分において確かめられることとして、経験されることとして説明していません。人の「変身」として書いていません。

もちろん、洗礼によって、私どもは変わりますし、変わりうるものです。洗礼は人を変える力をもっています。

しかしパウロは、その変化を、第一には、私どもの仕えている、仕えるべき主人が変わったことだと捉えています。洗礼以前、「かつて」、人は、だれも、まるで奴隷のように罪に仕えていた。これに対し「今」や人は「神に従順に仕える奴隷」、「義に仕える」者となっているのだと言うのです。

罪の奴隷というのは、分かりますが、「神の奴隷」という言い方は、少し違和感があるかも知れません。罪の支配の下にある人間は、まさに奴隷の比喩で表されるのがふさわしい。しかし神の支配は、前にも申し上げたことがありますが、それは恵みの支配であって、むしろ私どもを自由にするものです。神の恵みを受けた人は、その自由において、喜びをもって神に仕えるようになるのです。そのことを理解した上で私どもは「神の奴隷」なのです。

3　賜物としての永遠の命

キリストによって、信仰において私どもは義とされ、さらに信仰によって生きるものとされました。そのように生きることが許されたのです。すでに私どもみなキリストの支配、恵みのご支配の下にあります（コロサイ一・一三）。そのような者でありながら、しかし私ども、この世にあるかぎり、なお、不信仰から救ってくださいと祈らざるをえない存在です。

福音書の中に、息子を癒やしてもらおうとイエスのもとに行き、「おできになるなら憐れんでください」と言ったことを、「できれば、というのか」とイエスの反問を受け、次のように叫んだ一人の父親が出て来ます。「信じます、信仰のないわたしをお助けください」（マルコ九・二四）。私どもの信仰も、同じく、いつも不信仰と隣り合わせです。

この叫びは真実です。新しい命を生きる者とされた、信仰によって生きるものとされた、それでも、私どもの中に古い自分が顔を出し、罪の支配から脱却できない自分が現れます。「信仰のないわたしをお助けください」という祈りと一緒でなければ「信じます」などと到底言えないのです。しかしそのような私どもに、パウロは、なお次のように命じています。

かつて自分の五体を汚れと不法の奴隷として、不法の中に生きていたように、今これを義の奴隷として献げて、聖なる生活を送りなさい（一九節）。

すでに私ども、自分の体を汚れと不法の道具とするな、むしろ義のための道具とせよという命令を聞いています。

パウロは、同様の言葉を用いながら、更に、それによって「聖なる生活を送りなさい」と勧めています。

この「聖なる生活を送りなさい」というところは、新しい訳（聖書協会共同訳）では「聖なる者となりなさい」となっています。口語訳は「きよくならねばならない」です。直訳では、「義の奴隷としてあなたの五体（肢体）を献げなさい、聖となるために」です

「聖となるために」、ここに、私どもの、洗礼によって開かれた信仰の歩みの目標が語られています。聖ということが信仰においてはっきりした位置をもっていなければならないのです。

あなたがたは、罪の奴隷であったときは、義に対しては自由の身でした。では、そのころ、どんな実りがありましたか。あなたがたが今では恥ずかしいと思うものです。それらの行き着くところは、死にほかならない。あなたがたは、今は罪から解放されて神の奴隷となり、聖なる生活の実を結んでいます。行き着くところは、永遠の命です。罪が支払う報酬は死です。しかし、神の賜物は、わたしたちの主イエス・キリストによる永遠の命なのです（二〇～二三節）。

洗礼はキリスト者の生活の始まりであって、ゴールではないと、くり返し申し上げてきました。

それでは、キリスト者の生活のゴールは、何でしょうか。パウロは、罪との関わりで生きる者の人生の結末と、イエス・キリストとともに生きる者の終末的希望に触れて私たちを戒めています。

「罪が支払う報酬は死」、しかし「神の賜物は、私たちの主イエス・キリストによる永遠の命」（二三節）と言っています。「報酬」と「賜物」の違いに注意していただきたいと思います。

報酬とは、文字通り、働いたことへの当然の支払いです。給料です。「賜物」とは報酬との比較で言うと、いわば特別のボーナスのようなものです。ボーナスも、当然の支払いの中にあるものと言えばその通りですが、対価ではないという点で、やはり特別の恵みです。

賜物は、本来、いただく資格がないにもかかわらずいただく恵みです。罪と断絶して、私ども、神に仕え、義に仕えたいのです。永遠の命を、神様から、皆さんと共に賜りたいのです。

さて、永遠の命を、皆さんと共に神から賜りたい、これを北三教会での私の説教の最後の言葉といたします。

（二〇二三・三・二六）